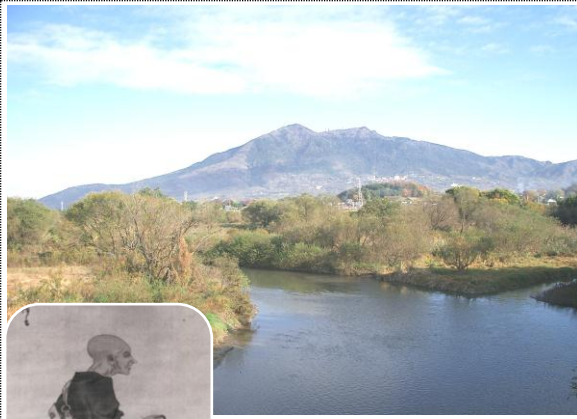


平成25年2月12日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



筑波山を「むらさきの山」と表現。その美しさを讃えた服部嵐雪の肖像画(『おののろ嶋雑記』より転載)

← 紫峰「筑波山」と、その心もとを流れ、世阿弥の謡曲『桜川』の舞台ともなった「桜川」(撮影：平成15年11月、つくば市巡見橋)

むらさきの筑波山

冬の訪れとともに、筑波山がよりはっきり見えるようになりました。冬に限らず、光の具合によっては山肌が紫色に見え、「紫峰」の名もうなずける気がします。筑波山、日本百名山のなかでは最も標高(877m)が低いにもかかわらず、古くから「東の筑波、西の富士」と並び称されてきました。

筑波の道

筑波山、双峰(そうほう)・ふたつの峰の神秘的で優美な姿は、古来多くの人々を魅了(みりょう)してきました。『万葉集』には筑波山を詠んだ長歌・短歌が25首載せられています。万葉人が心のよりどころとした大和三山(香具山なまみ 畝傍山うねみま 耳成山みみなり)のどれよりも多いのです。その後、古今和歌集、後選和歌集、新古今和歌集と歌に詠まれ続けてきました(小倉百人一首でお馴染みの陽成院(ようせいいん)の歌、「筑波嶺の嶺より落つる男女川(みなのがわ) こひぞつもりて淵となりぬる」は後選和歌集に載せられています)。また室町時代に最盛期を迎えた連歌(れんが)は、二人(以上)の人間が和歌の上の句と下の句をつないでいく詩の一種で「筑波の道」ともいわれますが、それは、その起源を『古事記』にある、筑波山を詠みこんだ、倭建命(やまとたけるのみこと)日本武尊(やマトスサノ)と御火焼翁(みひたきのおきな)との唱和問答歌(しょうわもんどうか)とすることによりまします。その問答歌は、倭建命が東征の帰り道、甲斐(山梨県)酒折宮(さかおりのみや)にお着きになった時、「新治(にひびり)筑波を過ぎて 幾夜か寝つる(東征の旅に出て、もう常陸の新治・筑波を過ぎて 幾夜寝たのだらうか)」と歌われたところ、御火焼翁が「日日並(かがや)べて 夜には九夜(ここのよ) 日には十日(とをむ)を(何日も経て、夜では九夜、日では十日を過ごしてこられました)」と、お答えしたものです。筑波山の中腹にある「筑波山梅林」(つくば市沼田)の駐車場脇に「連歌発祥之地」と書かれた歌碑とその説明板が並んで建っています。

鹿島紀行

江戸時代には連歌から俳諧(はいかい)が生まれ、松尾芭蕉(1644〜1694年)が蕉風と



「連歌発祥之地」歌碑(上)。男体山社殿のすぐ下に「日本武尊凱旋之御遺跡」の木札。この巨岩の地が連歌岳なのでしょうか(右、昭和13年頃、『昭和からの贈りもの』より転載)

呼ばれる芸術性の極めて高い句風を確立し、俳聖と呼ばれました。その芭蕉は1687(貞享4)年の秋に鹿島を訪れ、「鹿島紀行(鹿島詣)」を残しています。弟子の河合曾良と僧宗波を伴った芭蕉は、鹿島を目指し、深川芭蕉庵の門前から舟に乗り、小名木川、新川を東進、江戸川に入って、行徳で下船。行徳からは徒歩、八幡の里を過ぎて、鎌谷が原(鎌ヶ谷)という広い野原にでると、はるかかなたに筑波山が見渡せます。その様子を芭蕉は、「秦句(しやん 秦の都咸陽の地、ここでは広々としているさま)の千里とかや、目もはるかに見わたさる。筑波山むかふに高く、二峰並び立り。かの唐土(もうし)に双剣(そうけん)のみねありと聞えしは、廬山(ろさん)の一隅なり。」と詠(なぐさ)びました。我門人嵐雪(らんせつ)が句なり。すべて此山は日本武尊のことがばをつたへて、連歌する人のはじめにも名付たり。和歌なくばあるべからず、句なくば過ぐべからず。まことに愛すべき山の姿なりけらし。」と記しています。服部嵐雪(1654〜1707年)別号の一つが雪中庵(ちゆうぢやん)は、芭蕉の高弟の一人で、芭蕉から「草庵に桃桜あり。門人に其角(きかく)宝井其角)嵐雪あり」と称えられています。芭蕉が、目も遙かな秋空に見渡される双峰、筑波の山を眺める芭蕉の胸中に去来した

のが、この「むらさきの筑波」という嵐雪の一句でした。芭蕉の心に浮かんだこの一句は、やがて嵐雪の代表句として世に伝わっていききました。この句は、「雪の筑波山の景色もいいが、晴れた紫の筑波山の景色はさらにいい」と解釈されていますが、宮本宣一氏(中19回卒)は『筑波歴史散歩』(斎書房)のなかで、当時「雪」をもって富士山の代名詞とし、「紫」をもって筑波山の代名詞とするようになります。「雪の富士山よりも紫の筑波山の方がよい眺めだ」との解釈をしています。

江戸時代中期の俳人、与謝蕪村(1716〜1784)は、1742(寛保2)年から約10年間、下総国結城(茨城県結城市)に滞在し、嵐雪の句を踏まえて「ゆく春やむらさきさむる筑波山」と詠んでいます。どうやらこの頃から「むらさき」が筑波山の別称となっていたようです。



東京深川の芭蕉記念館に建つ松尾芭蕉像(上)、与謝蕪村の肖像画(下、『蕪村頭影俳句大学』より転載)



その後、芭蕉一行は鎌ヶ谷から布佐まで徒歩でたどり、布佐からは再び舟で鹿島まで行き、「月くまなくはれけるまに、夜ふねさし下して、鹿島に至る」、芭蕉の参禅の師であった仏頂禅師が閑居しておられた根本寺に滞在しています。

「二の鳥居」の句碑の拓影
「雪八末う左須万川 武良左
幾能筑波山 雪中庵嵐雪
(雪はまうさすま むらさ
きの筑波山 雪中庵嵐雪)」
(右、正面から見た句碑上)



嵐雪句碑

嵐雪の代表句とされた「雪は申さずまぶらさきのつくば哉」の句碑が、高田保たちが登った登山道（高田保の筑波登山記は小紙53号で紹介）、一の鳥居の傍らに建っています。表には「雪は申さずまぶらさきの筑波山 雪中庵嵐雪」、側面には「是より山上」の五文字が大きく記されています。1782（天明2）年10月13日、ちょうど嵐雪の命日、供養の営みとして、この碑が建立されたようです。建立者は杉野翠兄（すぎのすいけい）1754～1813 杉野治兵衛。翠兄は江戸時代中期・後期の俳人。竜ヶ崎の地主で油屋を営むかたわら、嵐雪の高弟大島（雪中庵）蓼太（りょうた）1718～1787の門に学び、小林一茶とも交流がありました。翠兄は筑波庵と号して、近隣に多くの門人を持つ活躍し、常南地方に俳諧を広めていきました。碑の裏面には「古叟嵐雪此山頭に紫の一字を得たるは芙蓉峰の雪にむかふておもておこせし言の葉なるをや。爾比磨利菟玖波（ににまり）くばのしげき陰にこゝの代十代も朽せざれと深きこゝろを石にこめて管立せるものは杉野翠兄。是をよみし是をしるすものは雪中庵蓼太」と刻まれています。（この句碑には「むらさきの筑波山」と刻まれています。が、芭蕉は『鹿島紀行』で「むらさきのつくば哉」と紹介しています。嵐雪の発句集『玄峰集』には「紫の筑波山」と出ていることから、本校第14代校長の長南俊雄先生（中21回卒）（『杉野翠兄―竜ヶ崎の俳諧師―』・崙書房）や石塚弥左衛門氏（『山は筑波嶺―文人群像―』・STEP）は、芭蕉の思い違いによるものと述べています）

も少なくなりりましたが、神郡から一の鳥居のある臼井を抜けていくこの登山道は万葉人も利用していたかもしれせん。718（養老3）年頃、常陸国の役人であった高橋虫麻呂（たかはしのむまろ）生没年不詳）は筑波山に登り、筑波山の歌をいくつか詠んでいます。万葉学者の犬養孝先生は、虫麻呂は国衙があった石岡から恋瀬川沿いに志筑・月岡・須釜を経て十三塚から風返し峠を越えて筑波に登ったと想定しています（犬養孝『万葉の旅』中・平凡社）。しかし、常陸国筑波郡の郡衙（郡役所）が平沢に置かれていたこと、『常陸風土記』に記載されている飯名神社が臼井に祀られていることを考えれば、佐谷、東城寺付近を通り、平沢に至り、神郡から臼井を抜けて山頂を目指したこともあったのではないのでしょうか。

「筑波山に登る歌一首ならびに短歌（『万葉集』巻9雑歌の部）―高橋虫麻呂 草まくら 採の憂（うれ）を慰（なぐさ）もる 事もありやと 筑波嶺に 登りて見れば尾花ちる 師付（しす）の 田井に雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海（あふ）も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の よけくを見れば 長きけに思ひ積み来し 憂は息（な）みぬ

反歌
筑波嶺の裾廻（すそい）の 田井に秋田刈る 妹（いも）がり遣（や）らむ黄葉（もみぢ）手折（てを）らな

江戸時代になると、筑波山が江戸城の鬼門にあたることから、782（延暦元）年に徳一上人が創建したとされる知足院中禅寺が祈願所に定められ、三代将軍徳川家光により大伽藍（現在の筑波山神社付近）にありましたが、明治の廃仏毀釈で大御堂を残すのみとなってしまいました）が造営され、神郡からの登山道も整備されました。そのため、この道は多数の参詣客でにぎわうようになり、翠兄たちがこの登山道脇にこの句碑を建立したのも

追記

茨城県立歴史館特別展「筑波山」開催
2月9日（土）から3月20日（木）まで、水戸市の茨城県立歴史館にて特別展「筑波山―神と仏の御座（おわ）す山―」が開催されています。担当は永井博氏（高29回卒）・大関武氏（高35回卒）らです。

むらさき

筑波山の「むらさき」を醤油のブランド名にしたのが、土浦の国分勘兵衛の「大國屋」です。江戸時代、土浦は、銚子・野田と並ぶ醤油の名産地でした。江戸時代後期の国学者である中山信名（なかやまのぶな）1787～1836）や色川三三（いろがわのぶ）1801～1855）により編纂された『新編常陸国誌』土産の部には、「土浦にて大國屋というものの製するを上品とす。印に亀甲の内に大の字を書く故に亀甲大と称す。江戸にても上品とす……下総の銚子、佐原よりも出れども、土浦の亀甲大に及ぶものなし」とあり、上質の大豆と小麦を原料とした土浦産醤油の質の良さを述べています。



文久元年「關東造醤油屋番付」。力士とは別格扱いで、行司には色川三郎兵衛、その下の差添には、大國屋勘兵衛の名が見えます（『史料で探る茨城の歴史』より転載）

銚子では1616（元和2）年、野田では1624（寛永元）年に醤油醸造が始まっています。が、土浦では、1712（正徳2）年に、伊勢松阪の商人であった4代国分勘兵衛が城下の田宿町（現大手町）に醸造場を設け、醤油造りを開始したのが始まりであると言われています。当時の土浦藩主は

土屋政直で、領内の産業振興に努め、醤油造りを奨励したため、業者の数も次第に増えて、1761（宝暦11）年には9軒、1866（慶応2）年には19軒になっていました。その代表格が大國屋勘兵衛と色川三郎兵衛で、両者とも江戸城西の丸へ醤油を納めて（徳川幕府御用達）土浦醤油の名を高めていきました。特に大國屋の醤油は美味で、大國屋の「大」を土浦亀城の亀甲六角の枠にはめた「亀甲大」印の醤油は非常に評判となり、なかでも「むらさき」という銘柄の醤油は、極上の酒よりも高価で売られたといひ、後に醤油の代名詞のように使われました。今でも料亭や寿司屋で醤油のことを「むらさき」とか「おひたち（常陸）」と呼ぶのは、ひとえに土浦産醤油の評判によるものです。（高21回卒 松井泰寿

余録

現在の「大國屋」と土浦醤油
大國屋は明治維新を迎えると、醤油醸造業を他に譲り、広く食品販売を業とする問屋に転向しました。1888（明治21）年にはビール販売を手がけ、1908（明治41）年には「K&K」印（国分と勘兵衛の頭文字をとってつけています）を商標とし、さらに1909（明治42）年には味の素、1919（大正8）年にはカルピスの発売を開始するなど、たえず時代を先取りし、発展してきました。現在、江戸店のあった日本橋1丁目1番地に本社を構え、社名も「国分株式会社」と改め、日本一の総合食品商社として、創業300周年を迎えました。松阪市射沢町には、今も亀甲大の商標のある五つの蔵を有する國分邸が、江戸時代の豪商「大國屋」の面影をしのばせています。土浦では、市内虫掛の柴沼醤油が唯一土浦醤油の伝統を受け継いでいます。



東京日本橋にある国分本社と、亀甲大の商標柴沼醤油と、その商標

